

原著

医療福祉を学ぶ学生の進路選択 —医療系学生と福祉系学生の比較を手がかりに—

竹中麻由美*¹ 熊谷忠和*¹ 土屋景子*²

要 約

国民生活の変化に伴い、人々が直面する生活課題は多様化・複雑化している。こうした課題に対応し人々を援助できる質の高い医療福祉専門職が求められている。また医療現場では、患者を主体とした医療が重視され、チーム医療の重要性が指摘されている。高い専門性をもったスタッフが連携して医療を提供することが求められている。本稿の目的はセラピスト養成課程（以下、医療系学生）およびソーシャルワーカー養成課程（以下、福祉系学生）で医療福祉を学ぶ学生が、進路を選択する動機を比較検討し、専門職養成についての示唆を得ることである。調査の結果、医療系学生は学びたいという目的意識を持ち、自分自身の判断で大学を選択・決定していた。セラピストについて、社会に貢献できる、満足感を得られる仕事である、一生の仕事として誇りを持てる仕事であると認識していた。福祉系学生は、医療系学生と比較するとソーシャルワークを学ぶことに積極的意義を感じていなかったものの、ソーシャルワーカーは社会に貢献できる仕事であり、誇りを持てる仕事であると感じていた。医療系学生も福祉系学生も、セラピストやソーシャルワーカーという仕事が他者を支援する仕事であることを認識し、他者への貢献や支援を通じて、自分自身が満足や誇りを感じることにやりがいを感じていた。福祉系学生（新入生）の74%はソーシャルワーカーに出会ったことがなく、入学時には「ソーシャルワーク」は介護とは異なること、相談や援助を意味することは漠然と理解していた。そして「福祉を学びたい」「福祉に興味がある」という意識があった。養成課程の中でゴールとしてのソーシャルワーカー像を明確に示す必要性が示唆された。

1. 諸言

1.1 研究の背景

1.1.1 福祉専門職を取り巻く背景

社会福祉士は、1987（昭和62）年に制定された「社会福祉士及び介護福祉士法」によって誕生した国家資格である。その職務について、2007（平成19）年に改正された同法2条に「専門的知識及び技術をもって、身体上もしくは精神上の障害があること、または環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導、福祉サービスを提供する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者との連携及び調整その他の援助を行うことを業とする者」と示されている。法改正と並行して社会福祉士養成課程における教育内容も見直された。「社会福祉士養成

課程における教育内容等の見直しについて」（平成20年4月、厚生労働省）には「現在、我が国においては、団塊の世代が65歳以上に達する2015年を目前にし、さらに10年後の2025年には75歳以上の後期高齢者数が2,000万人を超えることが見込まれており、いわば高齢化の『最後の急な上り坂』を登りはじめたところです。このような中、認知症の者や医療ニーズの高い重度の者が増加するとともに、成年後見や障害者の就労支援など、国民の福祉・介護ニーズはより多様化・高度化してきている状況にあり、これらのニーズに的確に対応できる質の高い人材を安定的に確保していくことが喫緊の課題となっている」と指摘されている。この「2025年問題」では高齢者への対応が課題とされているが、雇用、社会保障、貧困、虐待など、人々が直面する生活課

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科 *2 川崎医療福祉大学 医療技術学部 リハビリテーション学科
(連絡先) 竹中麻由美 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail: mayumit@mw.kawasaki-m.ac.jp

題は拡大し、社会福祉士が支援する対象も広がっている。

福祉ニーズの多様化・複雑化とソーシャルワークの関わりについては以前より指摘されており、第18期日本学術会議社会福祉・社会保障研究連絡委員会「ソーシャルワークが展開できる社会システムづくりへの提案」(2003)は、個人や家族と社会・生活環境との関係に関わり援助するソーシャルワーク実践が、かかせないものになっているのに、ソーシャルワーカー国家資格である社会福祉士や精神保健福祉士の養成と任用制度に整合性がないことを指摘し、ソーシャルワーク実践を展開できるシステムを各自治体毎に構築すること、養成教育機関は教育水準の向上を図ることなどを提言している。また日本学術会議社会学委員会社会福祉学分会「近未来の社会福祉教育のあり方について－ソーシャルワーク専門職資格の再編成にむけて－」(2008)は、ソーシャルワーカーの活動内容が見えにくく、ソーシャルワークの社会的認知度が低い現状を指摘し、高い実践力をもった人材養成の必要性を指摘している。

1.1.2 医療現場を取り巻く背景

筆者たちは、それぞれ医療機関でソーシャルワーカーやセラピストとして勤務した経験を持ち、現在は養成教育機関で教員として勤務している。医療機関は言うまでもなく医療法を根拠法としており、社会福祉実践を第一義の目的としない機関である。医師は、教師、弁護士と並び古典的三大専門職と称され、医療は専門性の高い分野として発展してきた。しかし、時代の趨勢に伴い患者を主体とした医療が求められるようになり、チーム医療の重要性が指摘されている。「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」(平成22年4月、厚生労働省)では、「近年、質が高く、安心で安全な医療を求める患者・家族の声が高まる一方で、医療の高度化や複雑化に伴う業務の増大により医療現場の疲弊が指摘されるなど、医療の在り方が根本的に問われているところである。こうした現在の医療の在り方を大きく変え得る取組みとして、多種多様な医療スタッフが、各々の高い専門性を前提とし、目的と情報を共有し、業務を分担するとともに互いに連携・補完し合い、患者の状況に的確に対応した医療を提供する『チーム医療』に注目が集まっており、現に、様々な医療現場で『チーム医療』の実践が広まりつつある」としている。そして、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士による喀痰等の吸引、作業療法の範囲、他施設と連携を図りながら患者の退院支援等を実施する医療ソーシャルワーカー(MSW)の積極的活用などについて言及している。

このように、質の高いソーシャルワーカーやセラピストの必要性が指摘され続けているが、現実はその要請に応じているのだろうか。(財)社会福祉振興・試験センターの報告によると、社会福祉士の登録者数は平成25年9月末現在で165,494人である。社会福祉士国家試験の合格率はおおむね30%前後を推移しており、保健医療分野の国家試験と比べ合格率は低い。たとえば、平成25年度国家試験の合格率は、社会福祉士が27.5%に対して、理学療法士が83.7%、作業療法士が86.6%、言語聴覚士が74.1%である。平成25年7月現在の社会福祉士養成施設は265、平成24年4月時点での理学療法士養成施設数は245、作業療法士養成施設数は173、言語聴覚士養成施設数は68である。平成24年度末現在の免許取得者数は、理学療法士100,635人、作業療法士61,847人、言語聴覚士20,347人である¹⁾。病院における100床当たりの従事者をみると、平成23年10月現在で、理学療法士3.3人、作業療法士2.1人、言語聴覚士0.7人、社会福祉士0.4人、医療社会事業従事者0.6人である。ただし医療社会事業従事者という類型は資格を要件とはしておらず、社会福祉士が事務職などとして勤務している可能性があると同時に、社会福祉士が医療社会事業従事者としてダブルカウントされている可能性もある²⁾。

臨床現場で勤務する従事者数の少なさに加えて、冒頭でも述べたように、社会福祉士資格が制定されて30年と歴史が浅い。保健医療分野の他専門職と比較すると、保健師看護師助産師法(制定当時は「保健師看護師助産師法」)が制定されたのが昭和23(1948)年、理学療法士及び作業療法士法が制定されたのが昭和40(1965)年である。ソーシャルワーカーが世間に認知されていくためには一定の時間を要するであろう。今後、チーム医療の一端を担い、国民に貢献できる、そして国民に認知される、より質の高いソーシャルワーカーを養成するためには、こうした現状に即した専門職養成課程を構築する必要があるのではないだろうか。ソーシャルワーカーやセラピストなど、資格取得後に臨床で対人援助専門職として通用する人材を養成する教育のあり方については、それぞれの分野で指摘されている³⁻⁸⁾。

本研究では、A大学で学ぶ学生を対象とした調査を手掛かりに、セラピスト養成課程の学生とソーシャルワーカー養成課程の学生を比較し、今後のソーシャルワーカー教育について考える。なお本研究では、作業療法及び言語療法(以下セラピーと記す)を学ぶ学生を「医療系学生」、ソーシャルワークを学ぶ学生を「福祉系学生」とした。

2. 研究方法

2.1 調査対象と実施方法

2.1.1 福祉系学生と医療系学生の進路選択

医療福祉専門職を養成する A 大学で作業療法および言語療法を学ぶ3年次生（以下医療系学生とする）80人、ソーシャルワークを学ぶ3年次生（以下福祉系学生とする）129人から性別などの偏りなく抽出した上で調査への協力を得られた31人に対し、集合調査法により配布・回収を行い、無記名自記式での質問紙調査を実施した。大学を選択した理由、専攻でセラピー、ソーシャルワークを学ぶ理由について「まったくその通りである」「どちらかといえばその通りである」「どちらでもない」「あまりそうではない」「まったくその通りではない」の5件法で質問した。調査項目は、井上と熊谷らが用いた項目を参考に作成した⁹⁾。調査期間は2011年11月～12月である。分析はSPSSを用いた。

2.1.2 福祉系学生がソーシャルワーカーを目指す意識

ソーシャルワーク実習を修了した3年次生129人から対象者を性別などの偏りなく抽出した上で調査への協力を得られた31人に対して、(1)「ソーシャルワーカーになりたい」と思うかについて、「まったくその通りである」「どちらかといえばその通りである」「どちらでもない」「あまりそうではない」「まったくその通りではない」の5件法で質問し、(2)その理由について、自記式自由記述の調査を実施した。集合調査法により配布・回収を行った。調査期間は2011年11月である。

2.1.3 福祉系学生（新入生）が持つ「社会福祉」へのイメージと進路選択

ソーシャルワークを学ぶ新入生134人に対して(1)「社会福祉」という言葉から連想する単語、(2)大学を選択した動機、(3)ソーシャルワーカーという職業の人に会ったことがあるか、について無記名自記式の調査を実施した。集合調査法により配布・回収を行った。調査期間は2011年4月である。

2.2 倫理的配慮

調査に際し、調査への協力は自由意志に基づくこと、調査は無記名で実施し結果は統計的に処理され回答者個人が特定されないこと、学術的な目的のみに使用することを口頭及び文章で説明し、調査票の提出をもって調査に同意したとみなした。

3. 結果

3.1 福祉系学生と医療系学生の進路選択

分析にはSPSSを用い、Mann-WhitneyのU検定を実施した結果を表1および表2に示した。

3.1.1 医療系学生の進路選択

80人から回答を得、そのうち欠損値がなかった男子17人、女子61人、計78人の回答を分析した。大学を選択した理由として「あなたにとって最も影響力のあったもの上位3つ」を尋ねた結果、「望んでいた学びができる」(60人)、「私自身の判断でこの大学を選んだ」(30人)、「卒業生の就職率が良かった」(28人)という回答が上位であった。セラピーを学ぶ理由として「あなたにとって最も影響力のあったもの上位3つ」を尋ねた結果、「セラピストになりたかった」(36人)、「社会に貢献できる仕事があった」(35人)、「セラピストの仕事は一生の仕事として誇りをもつことができる」(29人)、「私自身の強い意志で選んだ」(28人)という回答が上位であった。

3.1.2 福祉系学生の進路選択

男子18人、女子13人、計31人から回答を得た。欠損値はなかった。大学を選択した動機として「あなたにとって最も影響力のあったもの上位3つ」を尋ねた結果、「卒業生の就職率が良かった」(16人)、「望んでいた学びができる」(12人)、「家族あるいは友人が勧めてくれた」(10人)、「私自身の判断でこの大学を選んだ」(10人)という回答が上位であった。ソーシャルワークを学ぶ理由として「あなたにとって最も影響力のあったもの上位3つ」を尋ねた結果、「社会に貢献できる仕事があった」(14人)、「ソーシャルワーカーの仕事は、高い満足感が得られる」(9人)、「ソーシャルワーカーの仕事は一生の仕事として誇りをもつことができる」(9人)という回答が上位であった。

3.1.3 医療系学生と福祉系学生の進路選択の比較

医療系学生と福祉系学生の「大学を選択した理由」および「セラピー／ソーシャルワークを学ぶ理由」に有意な差があるのかをみるためにU検定を行った。統計的に有意な差が認められた項目を表1および表2に示した。「大学を選んだ理由」では、医療系学生は福祉系学生より「望んでいた学びができる」「私自身の判断でこの大学を選んだ」という回答が多かった。福祉系学生は医療系学生より「授業料が手頃な値段であった」「家から通学できる距離である」「ケアを必要としている人がいるので、近くにいないといけなかった」「特別な理由はなかった」「本当はこの大学に入りたくなかった」という回答が多かった。「セラピー／ソーシャルワークを学ぶ理由」では、医療系学生は福祉系学生より「社会に貢献できる仕事があった」「セラピスト／ソーシャルワーカーになりたかった」「セラピスト／ソーシャルワーカーの仕事は、高い満足感が得られる」「セ

ラピスト／ソーシャルワーカーの給料が良かった」
「セラピスト／ソーシャルワーカーの仕事は、社会から尊敬されている」「セラピスト／ソーシャルワーカーの仕事は一生の仕事として誇りをもつことができる」「この学科を卒業すると高い割合で就職できる」「私自身の強い意志で選んだ」「この学科は実習に関して評判が良かった」という回答が多かった。福祉系学生は医療系学生より「この学科に入ることに特別の理由はなかった」「特にセラピー／ソーシャルワークを学びたいとは思っていなかった」という回答が多かった。

3.2 福祉系学生がソーシャルワーカーを目指す意識

男子18人、女子13人、計31人から回答を得た。欠損値はなかった。ソーシャルワーク実習を修了した福祉系学生では「ソーシャルワーカーになりたい」に対し「あまりそうではない」「まったくその通りではない」という回答はなかった。「どちらでもない」と回答した者は、その理由として、「自分が想像していたものと違い仕事を続けていけるか不安」「自分にできるかどうかわからない」「向いているかどうかわからない」「やっていけるかどうかわからない」「ほかの仕事がしたいと思う」「給料が安い」などを挙げていた。「ソーシャルワーカーになりたい」に対し「どちらかといえばその通りである」「まったくその通りである」と回答した者は、その理由として「やりがい」や「働きがい」「役に立てる仕事」などを挙げていた。

3.3 福祉系学生（新入生）が持つ「社会福祉」へのイメージと進路選択

1年次生134人から回答を得た。「社会福祉」という言葉から連想するものとして回答した単語数の総数は787、1人が回答した単語数の最大値は22、最小値は0であった。10以上の単語を回答した者は19人、全く回答できなかった者は3人であった。出現した787の単語を検討し、似通ったものをカテゴリーにまとめ出現頻度を表3に示した。「支援、援助、助ける、手助け」と、助けることに関連した用語が70、「介護」が55、「相談」が41であった。職名や資格名である「ソーシャルワーカー、ソーシャルワーク、医療ソーシャルワーカー」が58、「社会福祉士、国家資格、精神保健福祉士」が36であった。社会福祉の領域である「高齢者、老人、お年寄り、老人ホーム」が64、「障害者、障害、障害者福祉、身体障害」が36、「児童、子供、子育て、児童養護施設」が29であった。「ボランティア」「施設、養護施設」が18、「バリアフリー」が17であった。

「ソーシャルワーカーという職業の人に会ったことがあるか」という質問に対して、「会ったことがある」と回答した者は34人、「会ったことがない」と回答した者は100人であった。

この大学を選択した動機について自由記述で回答をもとめた。129人が回答し、複数回答を整理して得られた動機は192であった。これらの回答を検討し、似通ったものをカテゴリーにまとめ「ソーシャルワーカーに会ったことがある」「ソーシャルワーカーに会ったことがない」と回答した者の「大学を選択した動機」について、主な結果を表4に示した。

表1 大学を選んだ理由

		医療系学生 (n=78)	福祉系学生 (n=31)
		平均ランク	平均ランク
望んでいた学びができる	**	65.0	29.8
家族あるいは友人が勧めてくれた		-	-
高校の先生などが勧めてくれた		-	-
私自身の判断でこの大学を選んだ	**	59.6	43.4
この大学の良い評判があった		56.4	51.4
授業料が手頃な値段であった	**	49.7	68.4
家から通学できる距離である	**	48.9	70.3
卒業生の就職率が良かった		-	-
オープンキャンパスに参加し、印象づけられた		-	-
大学のパンフレットや広告に、印象づけられた		-	-
ケアを必要としている人がいるので、近くにいないといけなかった	**	49.3	69.5
特別な理由はなかった	**	50.1	67.4
本当はこの大学に入りたくなかった	*	50.7	65.8

注1) Mann-Whitney の U 検定による有意差検定, * : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$

注2) 平均ランクとは2つのグループのデータを込みにして順位をつけ、それを再度グループごとに分けて順位の平均を求めたもの。

表2 セラピー／ソーシャルワークを学ぶ理由

		医療系学生 (n=74)	福祉系学生 (n=36)
		平均ランク	平均ランク
自分の能力に適していた		－	－
自分の性格に合っていた		－	－
社会に貢献できる仕事があった	**	61.2	39.5
セラピスト／ソーシャルワーカーになりたかった	**	63.3	34.1
セラピスト／ソーシャルワーカーの仕事は、高い満足感が得られる	**	61.7	38.1
セラピスト／ソーシャルワーカーには昇進のチャンスがある		－	－
セラピスト／ソーシャルワーカーの給料が良かった	**	60.7	40.8
セラピスト／ソーシャルワーカーの仕事は、社会から尊敬されている	**	56.8	50.5
セラピスト／ソーシャルワーカーの仕事は 一生の仕事として誇りをもつことができる	**	61.1	39.6
セラピスト／ソーシャルワーカーを利用している人を知っている		－	－
セラピスト／ソーシャルワーカーと話した経験があり感銘を受けた		－	－
この学科を卒業すると高い割合で就職できる	**	59.3	44.2
家族や友人が勧めてくれた		－	－
高校の先生などが勧めてくれた		－	－
私自身の強い意志で選んだ	**	62.6	35.9
オープンキャンパスに参加し、印象づけられた		－	－
この学科は実習に関して評判が良かった	**	61.5	38.7
この学科に入ることに特別の理由はなかった	**	48.6	71.2
特にセラピー／ソーシャルワークを学びたいとは思っていなかった	**	45.9	77.8

注1) Mann-Whitney の U 検定による有意差検定, * : p<0.05 ** : p<0.01

注2) 平均ランクとは2つのグループのデータを組みにして順位をつけ、それを再度グループごとに分けて順位の平均を求めたもの。

表3 福祉系学生（新入生）が「社会福祉」から連想する単語

	出現頻度
支援, 援助, 助ける, 手助け	70
高齢者, 老人, お年寄り, 老人ホーム	64
ソーシャルワーカー, ソーシャルワーク, 医療ソーシャルワーカー	58
介護	55
相談	41
障害者, 障害, 障害者福祉, 身体障害	36
社会福祉士, 国家資格, 精神保健福祉士	33
児童, 子供, 子育て, 児童養護施設	29
ボランティア	18
施設, 養護施設	18
バリアフリー	17

「福祉を学びたい」「福祉に興味があった」など「望んでいた学びができる」は40であった。「社会福祉士の資格が取れる」「精神保健福祉士の資格がとれる」など「資格がとれる」が37、「国家試験の合格率が高い」が8であった。「将来、福祉で働きたい」「人の役に立つ仕事をしたい」「障害者とかかわる仕事をしたい」など「福祉の仕事をしたい」が37、「就職率が良い」が13であった。ソーシャルワーカーに会ったことのない学生の方がソーシャルワーカーに会ったことがある学生より「望んでいる学びができる」「福祉の仕事をしたい」という回答が多かった。

4. 考察

4.1 医療系学生と福祉系学生の進路選択

医療系学生と福祉系学生の進路選択を比較した結果、以下の傾向が示された。

医療系学生は、学びたいという目的意識を持ち、自分自身の判断で大学を選択・決定していた。将来の職業としてセラピストになりたいという強い目的と意志を持ってセラピーを学んでいた。セラピストという職業について、給与の良さのみではなく、社会に貢献できる仕事である、満足感を得られる仕事である、社会から尊敬される仕事であり、一生の仕

表4 福祉系学生（新入生）が大学を選択した動機

	ソーシャルワーカーに 会ったことがある (n=34)	ソーシャルワーカーに 会ったことがない (n=100)
	出現頻度	出現頻度
望んでいる学びができる	6	34
家族や友人が勧めてくれた	2	1
高校の先生などが勧めてくれた	1	0
家が近い	0	9
就職率が良い	4	9
オープンキャンパスの印象が良かった	2	1
国家試験の合格率が高い	2	6
施設が充実している	2	3
資格がとれる	9	28
ソーシャルワーカーになりたい	2	5
福祉の仕事がしたい	13	24

事として誇りを持てる仕事であると認識していた。卒業後の高い就職率を意識しつつ、自らの意志で実習が充実した学科でセラピーを学ぼうとしていた。本田らは、看護、理学療法、作業療法、放射線技術を学ぶ学生を対象とした調査で、医療系大学進学時の進路決定プロセスの分類として「早期決定型」から「出会い型」までの5類型を示し、これらの類型によって入学後の職業アイデンティティが異なることを指摘している¹⁰⁾。中野らは、医療系専門学校生の進学志望動機と職業同一性について調査し、志望動機として「他律的動機」「自己の可能性追求」「無目的・漠然」「適性考慮」「専門的価値の追求」の5因子を抽出し、志望動機の特徴をふまえた職業的同一性に対する教育の必要性を示唆している¹¹⁾。進路選択の時点で、将来の職業に対して誇りを感じることは、学ぶ上で重要な要素となるだろう。

福祉系学生は、「授業料が手頃な値段であった」「家から通学できる距離である」「ケアを必要としている人がいるので近くにいないといけなかった」などの理由で大学を選んでいった。昨今の学生の状況から推察すると、家から通学できる距離であることを大学選択の理由としたのは、経済的事情のみならず、衣食住に関して保護者に任せる生活をしてきたため一人暮らしの自信がないなどの理由も考えられる。また「大学を選んだ特別の理由はなかった」「本当はこの大学へ入りたくなかった」と回答している学生がいた。ソーシャルワークを学ぶ理由について「この学科で入ることに特別の理由はなかった」「特にソーシャルワークを学びたいとは思っていなかった」と考えていた。福祉系学生は医療系学生と比較すると、大学を選択する理由として、自分自身の“学び”よりも、通学のしやすさ、経済的負担の軽さなどの環境面を重視し大学を選んでいった。特に選択し

た理由がない、本当はこの大学へ入りたくなかったなど、消極的選択の結果として進学している傾向が伺われた。またソーシャルワークを学ぶ理由についても同様の傾向がみられた。井上と熊谷は、ソーシャルワークを学ぶ英国・米国・日本の学生について検討し、日本の学生の特徴を、英国・米国の学生に比べ、大学の評判や授業料、実家からの距離などをあまり考慮せず、幅広い選択の中から大学を選択している、と示唆している。また「ソーシャルワーカーになりたかった」「ソーシャルワーカーの仕事には高い満足感を得られる」などの項目に対して「そうではない」と回答した学生の割合が英国・米国の学生よりも多いことに着目し、相対的にはあるが、日本の学生はソーシャルワーカーになること自体への動機づけが低いこと等から、社会の中でのソーシャルワーカーの位置づけが明確でない可能性を示唆している⁹⁾。医療系学生は、セラピストを社会に貢献できる誇りを持てる仕事だと認識して、セラピストになることを希望し、強い意志をもって学んでいたが、福祉系学生は、大学に入ることやソーシャルワークを学ぶことに積極的意義を感じていない傾向がみられた。こうした学生の特徴に配慮した養成が求められるだろう。積極的理由を持たずに進学しソーシャルワークを学ぶ状況にある学生たちが、入学後の早い時に学ぶ意欲を持てるような工夫が必要ではないか。セラピストもソーシャルワーカーも共に対人援助専門職であり、患者やクライアントからの肯定的評価や、他者の役に立つという自己効力感が、職業を選択する上での動機づけになり、専門職を目指して学ぶ動機ともなると考えられる。井上と熊谷が指摘した、社会の中でのソーシャルワーカーの位置づけの不明確さや他者からの肯定的評価や自己効力感の得にくさなどが、進路選択の際に影響し

ているかもしれない。医療系学生と福祉系学生が入学後に学ぶ環境の特徴も学生に影響しているのではないだろうか。調査対象とした医療系学生が在籍する養成課程の卒業学生は、過去ほぼ全員が医療機関に就職しており、「資格を取得し病院で働く」という一つの明確な職業モデルが存在し、目的達成に向けて友人と共に学ぶという構造が確立・継続しやすいのではないだろうか。藤井らは、看護、理学療法、作業療法、放射線技術を学ぶ学生を対象とした調査の結果、学生たちが職業的なモデルを求めていることを指摘している¹²⁾。一方、セラピストの多くが就職する医療現場では、勤務する者のほとんどが国家資格をもった専門職であり、その行為の多くが診療報酬に位置付けられている。基準の人員配置が定められている専門職もあり、医療機関が職員を雇用する根拠ともなっている。診療報酬上にソーシャルワーカーが明記されている項目は限られており、これもまさにソーシャルワーカーの位置づけの不明確さといえる。

4.2 福祉系学生の進路選択

ソーシャルワーカーが勤務する現場は医療機関に限らず、国民の生活状況の変化に応じて広がっている。ソーシャルワーカーの必要性が認められ、ソーシャルワーカーに対する社会からの要請もあるものの、その業務範囲の広さがいまいさへとつながり、学生がソーシャルワーカーの業務について明確に実感できないのではないか。大学や学科を選択する際に「国家資格が取得できる」と勧められて選択したとしても、「国家資格を取得して」その先で何をするかというイメージが明確でなければ学習意欲は高まらないのではないか。福祉系学生は実習での体験によって、ソーシャルワーカーの仕事にやりがいを感じ、ソーシャルワーカーになりたいと感じていた。現場のソーシャルワーカーに会うことは、学生の意欲を向上させる効果がある。

一方、福祉系学生（新入生）が「社会福祉」から連想する単語では、支援、援助、助ける、手助け、相談、介護などの行為が挙げられていた。またソーシャルワーカーやソーシャルワークという単語も挙げられていた。自分はソーシャルワークを学ぶという学生の意識はみてとれる。「社会福祉」からソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士や精神保健福祉士を連想しているのは、大学で学び資格を取得してソーシャルワーカーになるという意識の表れであろう。高齢者、障害者、児童などの単語は、社会福祉を利用する者を連想したと考えられる。福祉系学生（新入生）は、「社会福祉」における「ソーシャルワーク」について漠然としたイメージを持っては

いるものの、入学前にソーシャルワーカーに会ったことがないという者が、全回答者の74.6%を占めている。つまり、何となく聞いたことがあるものの実態を知らないままソーシャルワーカーを目指しているともいえる。ソーシャルワークの業務は、「社会福祉士及び介護福祉士法」に定められている通り、相談援助や調整業務などが中心となる。作業療法士や言語聴覚士などの医療職が臨床で行う行為に比較すると、可視的になりにくく具体的な行為として理解しにくい。一方、ソーシャルワークの実践に触れる機会である現場実習を通じてソーシャルワーカーの業務を理解した学生は、ソーシャルワーカーという仕事のやりがいを感じると同時に、自分がソーシャルワーカーとして役にたつのかという不安や迷いをも感じている。ソーシャルワーカーという仕事と自分の将来を結びつけ、現実的に検討できてこそその逡巡であるといえる。国家資格を取得した後に、どのような職場、職種を目指していくのかを学生自身が決定していくためには、教育の中で、まず学生がソーシャルワーカーと出会い、より具体的にソーシャルワーカーについて知る機会をつくる必要がある。またこうした機会は、大学入学後のみならず、むしろ大学入学前に設定されることによって、進路決定の一助となる。五十嵐らは高校生を対象とした調査から進学動機の特徴として5群を抽出し、大学で学ぶ専門性や生活を積極的にとらえている群ほど職業の選択動機が明確化していると述べている¹³⁾。医療が主に疾病や障害のある人を支援対象とするのに対し、社会福祉が支援対象とする人々は生活上の困難を抱えた人々であり、より広範囲にわたる。どのような職場で、どのような人々を支援するソーシャルワーカーになりたいのか、到達目標が明確でなければ、たとえ資格を取得したとしても活用できないだろう。

福祉系学生（新入生）は、「福祉を学びたい」「福祉に興味がある」「障害について勉強したい」「高齢者福祉に興味がある」など、福祉に興味を持ち学びたいという意識をもっている。また「福祉の仕事がしたい」「人の役にたつ仕事がしたい」「障害児を支援したい」「高齢者の役に立ちたい」「施設で働きたい」など、他者を支援する仕事に就くことを目標としていた。こうした新入生の思いを確かな動機へと高め学習を進めるためには、まずゴールとしての職業を明確にすることが必要である。目標を達成するための手段として福祉やソーシャルワークについて学び、その結果として資格を取得して望む分野で働く、という道筋を学生が意識できる教育が必要であろう。

5. おわりに

本研究は限られた対象者に対する調査結果から考察したものであり、今後より広範な調査によって詳細な検討を重ねていくことが必要である。医療・福祉の現場では、より高い専門性をもった人材が求められている。学生時代から明確な目標を持ち学ぶ

ことが専門職養成につながることを明らかにし、教育のあり方を模索していきたい。

謝 辞

本研究は平成22年度川崎医療福祉大学の医療福祉研究費の補助により実施いたしました。ここに記して深く感謝いたします。

文 献

- 1) 国民衛生の動向・厚生指針。厚生労働統計協会，東京，2010。
- 2) 厚生労働省：医療施設（動態）調査・病院報告。2010。
- 3) 井野省三：理学療法士養成教育の展望－沿革・現状と今後の課題－。植草学園大学研究紀要，2，107－111，2010。
- 4) 公益社団法人日本理学療法士協会企画シンポジウム：理学療法士の臨床能力をいかに高めるか。理学療法学，37(8)，533－541，2010。
- 5) 澤俊二：理学療法士養成教育を考える。作業療法，30(5)，523，2011。
- 6) 特集 資格制度がソーシャルワークにもたらしたもの。ソーシャルワーク研究，37(2)，3－50，2011。
- 7) 特集 社会福祉系大学における人材養成の未来像－豊かな個性や思考力を育むために－。社会福祉研究，115，20－65，2012。
- 8) 社団法人日本社会福祉士養成校協会：高等学校長及び進路指導担当者の福祉・介護人材に関する基礎的研究。2009。
- 9) 井上信次，熊谷忠和：ソーシャルワーカーの教育養成に関する国際比較－米国・英国・日本の学生が持つ価値観の違い。川崎医療福祉学会誌，20(2)，427－435，2011。
- 10) 本田陽子，落合良行：重要な決定にまつわる心理的特性からみた医療系大学生の進路決定プロセスの特徴。筑波大学心理学研究，28，79－87，2004。
- 11) 中野良哉，大倉三洋，酒井寿美，栗山裕司，稲岡忠勝，宮崎登美子，柏智之：医療系専門学校生の進学動機と職業同一性－理学療法士，作業療法士養成課程の学生を対象に－。高知リハビリテーション学院紀要，11，1－8，2009。
- 12) 藤井恭子，本田陽子，落合幸子：医療系学生における職業的モデルがもつ特性。茨城県立医療大学紀要，9，103－109，2004。
- 13) 五十嵐敦，佐藤公文：高校生の大学進学動機の類型化とキャリア発達との関連について。福島大学総合教育研究センター紀要，10，25－32，2011。

(平成26年7月3日受理)

The Course – Selection of Medical Welfare Students

Mayumi TAKENAKA, Tadakazu KUMAGAI and Keiko TSUCHIYA

(Accepted Jul. 3, 2014)

Key words : course-selection, medical welfare, therapist students, social work students, professional

Abstract

Along with changes in people's lives, the life challenges people will face are becoming diverse and complex, so high-quality human resources who can support people are required. Further, in the medical field, the significance of patient-centered medicine is recognized, and a medical staff with high expertise and proper cooperation is required.

The purpose of this article is to compare and review the motivation of the course selection of therapist students to social work students, and to suggest a new perspective in professional education. Therapist students have a clear purpose to learn, compared to social work students. Social work students did not feel any positive significance in learning social work, but they recognized that the social workers contribute to society.

Therapist students recognize the therapist as a helping profession and social work students also recognize the social worker as the same.

74% of social work students (as freshman) had not met social workers, and they understood that social work is different from care work and that it is a means of assistance and consultation. Since they are interested in social welfare and want to learn social welfare, the need to show the social worker image as a goal of training in the education has been suggested.

Correspondence to : Mayumi TAKENAKA

Department of Social Work, Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : mayumit@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.24, No.1, 2014 1 – 9)